



原典で読む

# 外国人が見た日本

高橋知明

(瀬田玉川神社禰宜・公益財団法人  
鎮守の森のプロジェクト事務局)

## 第八回 ラザフォード・オールコック 『大君の都』(上)

幕末の日本を取り巻く世界情勢を語る上で絶対に外せない人物、ラザフォード・オールコック。イギリスの外交官であった彼は安政六年(一八五九)から元治元年(一八六四)まで日本での任にあり、途中賜暇で一時帰国するまでの約三年に亘る記録を、全三十九章、百四十以上の挿絵付で紹介した優れた大著『大君の都』(大君とは徳川将軍のこと)を残しました。政治、経済はもちろん、宗教や生活文化、産業に至るまで、この頃の日本の緻密な見聞録を綴っており、この著書こそ幕末史の基礎的文獻の一つとも言えるくらい貴重な資料となっています。オールコックは以前にご紹介したフオ

まずは日本の自然・景観です。江戸市中の景観についてオールコックは、世界有数の美しさを誇り、快適で住みよい場所であると評しています。

「もし江戸に、身分の高低を問わず、数多い軍事的な家臣とか大君の役人階級が存在しないとすれば、ここは、極東においてもっとも快適な住宅地のひとつになりうるであろう。喜望峰以東では、ここほどよい風土にめぐまれている国はない。……この首都には、ヨーロッパのいかなる首都も自慢できないようなすぐれた点がある。……どの方向に向かっても、でも、木のおいしげった丘があり、常緑の植物や大きな木で縁どられたにこやかな谷間や木陰の小道がある。……この風景と太刀打ちできるのは、イングラント地方の生垣の灌木の列の美しさぐらいなものであろう」

また、公使館の置かれた品川の東禅寺についても「江戸にはこれほどりっぱなところはない」「磨きたてたいかなる屋根も、一〇〇〇の柱をもって長くつらなる回廊も、その寺の美しさにはとてもおよばなかった」と、この上なく絶賛しています。

さらに、滞在中の彼は、箱館、熱海、瀬戸内海、長崎など日本国内をよく視察

ーチユンやシュリーマンのように、未知の東洋を見てみたいという興味や物見遊山で来日したのではなく、イギリスを代表する初代駐日公使として、極東におけるイギリスの名誉を保持し、国益を伸張する責任を負っていました。

しかも、単なる外交官ではなく、やり手の外交官でした。彼は元々医師でしたが、外交官に転じ、日本に赴任するまでアジアですでに十数年のキャリアがありました。アヘン戦争後の中国に赴任し福州、上海、広州などで領事を歴任。上海領事の頃には本国に進言書を送りアロー戦争のきっかけを作ったほどです。

来日当初は、列国の間でアメリカが対



オールコック

や旅行に出かけました。その旅の目的は「支配階級と大衆のあいだに実際に存在している関係、つぎに中流および下層の階級の人びとの知性の程度、そして最後に、東洋版の封建制度が農村と都会の人びとに与えた影響」の三点の調査にあり、即ち幕府の言うことを全く信用していないことから、自分の目で確かめたいという思いであったことが窺えます。しかし、その旅の中でも彼は、各地の風景の美しさに魅了されます。

「多くの地方の景色はきわめて美しい。たとえ壮大ではないとしても、野性味や、美しさをよくたもっている」と、どの場所においても世界に類を見ない風景の美しさに目を楽しまされると言っています。

一方、旅先で触れた日本人の心の温かさについても記しています。

当時の日本の公道には旅の疲れを癒す茶屋がわずかな間隔をおいて見かけることができました。三島に旅した時には

日外交の主導権を握っていました。しかし、オールコックの努力により次第にイギリスが主導権を確立。元治元年(一八六四)、長州藩は英仏蘭米の四国連合艦隊による下関砲撃を受けますが、これを主導したのもオールコックでした。

彼が滞在した時期は、開国への反作用が生じた時期で、米国公使秘書官殺害事件や桜田門外の変など殺傷事件が頻発。そのため幕府は多数の護衛を配しましたが、それにもかかわらず英国公使館は何度も襲撃に遭っています。外国人の生命・財産の安全を保障すべき幕府が責任を全うしないこともあり、彼は日本人を嘘つきだと繰り返し指弾しています。

また、近代文明の旗手で、七つの海を支配した大英帝国の外交官らしく、幕末の日本を「社会制度の面ではイギリスの一二世紀ごろの状態」きわめて遅れた社会状態」と極めて高飛車な態度で見下しています。イギリスは階級社会であり、同じ階級の人々との交流を好み、違う階級の人々を見下し皮肉ったりするところがあります。私も以前にそうしたことを体験したことがあります。『大君の都』を読んでそのことを思い出しました。

ところが、そんなオールコックでさえも、認めざるを得ないものが日本にはあったのです。

「これらの小屋(※茶屋)では、きわめて貧しい旅行者でもわずかばかりの現金で長時間の疲労をいやすに足ると思われる食事——熱く蒸したサツマイモや油であげた魚やお茶など——を丁寧に給仕してもらえ。……ひじょうに貧乏で困っている階級の人びとにこのような必要品の供給がなされ、ほんのわずかの利益ですべての人びとに親切にするとは大したものだ」と、貧しい旅行者に対しても水一杯差し上げることを当たり前のようにしていた茶屋の給仕のレベルの高さに接し感嘆しています。

また、奈良から京都へ渡る木津川の流域で立ち寄った茶屋では「……食事の出し方はひじょうに優雅なものだった。ひとりひとりに高さ一フィートのお膳があつて、三品ついていた。第一に輪切りのタケノコ、これは柔らかくて煮るとたいへんおいしいものである。つぎに塩魚、そしてご飯、それに醤油その他のちよつとした調味料があり、さらに消化を助ける酒が一本ついていた」と、美味しい食事を優雅に盛り付けし、最高の給仕で「もてなす」という心遣いに感動しています。

「おもてなし」という言葉が外国人を迎える上でのキーワードになっていますが、日本人が当たり前大切にしてきたことが、現代にも受け継がれていることが窺えますね。

(オールコック篇・全三回予定)